

# ホルモン療法の新薬開発進む

やまなし

## 医療最前線

県立中央病院から

《 73 》

前立腺がんの治療法の一つ、内分泌療法（ホルモン療法）で用いる新薬の開発が進んでいる。手術や放射線治療と異なり、薬でがんを抑えるホルモン療法は、使い続けると薬が効かなくなる「抵抗性」の状態になることがある。新薬の登場は、抵抗性前立腺がん治療の新たな選択肢として期待されている。

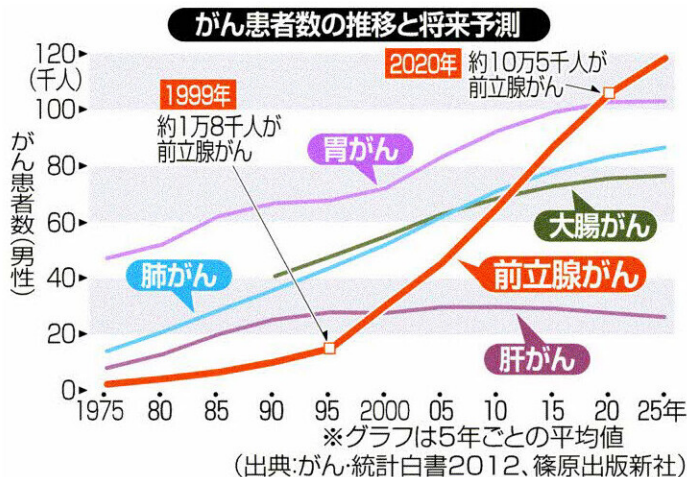
県立中央病院泌尿器科副科長の山岸貴裕医師によると、前立腺がんは男性ホルモン（アンドロゲン）の影響を受けて大きくなる性質がある。そのため、アンドロゲンを抑制し、がんの増殖を抑えるのがホルモン療法の目的という。

ホルモン療法には、アンドロゲンの多くを作り出す精巣を摘除する外科的去勢法と薬物療法



山岸 貴裕  
泌尿器科副科長

## 抵抗性前立腺がん 治療に光



がある。薬物療法では、脳の下垂体などからのホルモンの分泌指令を低下させる薬のほか、精巣の分泌を抑える薬、アンドロゲンの作用を抑える薬などがあ

る。「さまざまな注射薬や内服薬があり、効くことが多いが、5年前後続けると効かなくなるこ

ともある」と山岸医師。ホルモン療法抵抗性となった状態と、外科的去勢後に症状が悪化した状態を合わせて「去勢抵抗性前

立腺がん」といわれている。

去勢抵抗性となり、抗がん剤も効かなくなった場合、「今まではがんをコントロールするのが難しかった」（山岸医師）。しかし近年、より強化されたホルモン療法薬と抗がん剤が開発され、一つが今年3月に国内で承認された。ホルモンを作るのに必要な酵素を阻害する薬や、新たな抗がん剤も年内にも承認される見通しという。

前立腺がんは患者数の増加が著しく、2011年の県の集計では県内男性のトップ。全国でも1999年には約1万8千人

だったが、2020年以降には10万人を超えるともいわれている。山岸医師は「抵抗性の状態になる患者さんの増加も見込まれる中、がんを抑え込む治療の選択肢が増えた」と話している。

第2、4木曜日に掲載します